

～こころに笑顔の種がふる～

2019 Vol.55

はあとふる



地域の皆さまに、
Warm Heart(心)
Cool Head(知識・判断)
Beautiful Hands(技術)で
ヘルスケアサービスを提供するための
コミュニケーション誌

2019（平成31）年
平成から新たな時代へ。

「治し、支えるケア」へ。



私たちは2017年11月に、名称をこれまでの「医療法人永広会から「医療法人はあとふる」に変更しました。そして同時に、「島田病院」も改築に伴い「運動器ケアしまだ病院」として再出発しています。

病院が外部に広告できる診療科名のことを標榜診療科と言いますが、政令で定められており、勝手には表示できません。そして、一般的には身体を動かすためのシステムとして機能している「骨、関節、筋肉、神経」という運動器系の疾患や不具合について担当するのは、「整形外科」という診療科とされています。

「外科」というのは、「内科」と異なり、手術をするという診療方法を主体にしていますから、運動器

の問題に対して、手術以外の方法を行うのは、そぐわないとも思えるのです。しかし、私たちが大事だと考えているのは、身体の使い方や姿勢を見直したり、身体の弱いところや固いところを改善すること、病状が軽快に向かうよう指導する治療の方針です。それで、この方針に基づく治療方法と手術を含め、包括する言葉として「運動器ケア」という名称をつけることにしたのです。

これは広い意味でのリハビリテーションということにも通じます。つまり、身体の不具合に気づいて、その原因を探り、治療するともに、その不具合によって影響を受けている生活や人生そのものも、できるだけ元通りの状況に戻すようサポートする（いんぱん）です。

骨折を治し、骨がくっつくよう治療するだけではなく、元通りに、仕事や趣味、そして、スポーツ活動を再開できるようにまで医学的に指導し、支援することも、治療の一環であると考えているのです。

このことは、高齢者においても、重要な視点です。高齢になると、骨が弱くなり、つまずいて転倒することも起こります。防衛する上手なこけ方もできなくなり、骨折を起こすこともあるのです。なかでも深刻なのは、股の付け根の骨折です。痛みが強く、そのまま寝かせて骨が治るのを待つだけでは、身体が弱ってしまい、認知症も進み、食欲も落ち、床ずれなどの危険性もあります。そこで、十分に安全を確認して、手術を行うことも多くなっ

ています。技術革新により、ケガをしても早期にこうした対処をすれば、元の機能に戻っていただけの例も多くあります。ところが、しばらくして、今度は反対側に骨折を起こして、受診される例もあるのです。つまり、一つの骨折をきちんと治すだけでは不足で、次の骨折を防ぐ手当てを同時に進めておく必要があるということです。

私たちの国、日本では、ますます高齢化が進んでいます。そのなかで、こうした活動は大きな意義を持つものと思っています。同時に、がんや肺炎などの治療によっても、食事制限や安静によって身体の機能が低下する例は多くあります。こうした例に対しても運動器を元気に保つ「運動器ケア」を展開していきたいと考えています。

一つひとつの疾患の治療やリハビリテーションだけではなく、予防や生活支援を含めて、総合的なケアが継続して提供できるよう、グループ全体で取り組んでいくつもりです。

とはいえ、私たちのできることはご本人に必要なケアの全体からすれば、ほんの一部です。限られたことしかできないので、地域の行政や医療介護施設・事業者の方々とつながって、みんなで「治し、支える」体制づくりができればと考えています。

本年も、なお一層のご指導・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

はあとふるグループ
代表
島田 永和



特集
時々入院、
ほぼ在宅
八尾はあとふる病院の
地域包括ケア病棟



このまちの笑顔を支えたい

得意のリハビリ・ケアで、「その人らしい暮らし」を支える

目には見えないその人の
物語に寄り添う。
想い、分かち合い、その人を
支えるチームがここにある。

八尾はあとふる病院は、急性期後から生活期に至るまでのリハビリに特化した病院だ。回復期リハビリテーション病棟と地域包括ケア病棟を有し、外来リハビリ、通所リハビリ、訪問リハビリなどの事業を展開。切れ目なく、必要な方に過不足なく、リハビリ・ケアを提供している。

八尾はあとふる病院の最大の強みは、医師、看護師やセラピスト（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）、介護福祉士、薬剤師、管理栄養士、歯科衛生士、社会福祉士などが、互いに敬意を持ち、歩み寄り話し合える風土が根付いている点。多職種が連携し、対象者の「その人らしさ」を支えている。病棟も、いわゆる「病院」の雰囲気は感じられない。住み慣れた場所へ戻るために疾患をコントロールしつつ、社会とのつながりを見極め、その人らしい生活（人生）への解決策、支援サービスを提供している。

「時々入院、ほぼ在宅」 長期に渡り、本人と家族を支援

地域包括ケア病棟が担う役割は、「時々入院、ほぼ在宅」という言葉に集約される。高齢になっても、身体機能に障がいきたとしても、住み慣れたまち、自分の家で生活し続けたいと願う気持ちは、誰しも同じだ。だがリハビリもせずに成り行きに任せていけば、自宅で暮らすには機能が衰えすぎたり、家族の介護負担が大きくなりすぎたりもする。そうなる前に入院・リハビリをし、自宅で暮らせるだけの生活力を高め、再び自宅へと戻る。だから、「時々入院、ほぼ在宅」それが担う最大の役割だ。

しかし、どういった状態で過ごせば一番幸せなのか。「生きる目標」は、一人ひとり違う。その目標を一緒に探し、共有し、悩みや喜びを分かち合うには、長期間に渡る関係づくりが欠かせない。折をみて繰り返し利用していただくなかで、互いに対する信頼関係を築いていく。そうした利用の仕方ができるのも、地域包括ケア病棟ならではのメリットだ。

また、「レスパイトケア」*も担うべき大切な役割だ。介護するご家族の休息がなければ、持続的な介護は成り立たない。地域連携室では、社会福祉士などの資格を有する相談員が、ご本人の「その人らしい」生活環境や生活スタイルを提案・サポートすると同時に、はあとふるグループ内の在宅看護・介護サービス、地域の診療所、在宅サービス事業者とも連携。介護の現場に携わるさまざまな人たちがつながりながら、ご家族の在宅介護の負担の軽減を図っている。

住み慣れたまちや自宅で生活することが一時的に難しくなってしまった。そんな方にとって、何でも相談でき、サポートしてもらえる「駆け込み寺」のような存在になる。それが、八尾はあとふる病院地域包括ケア病棟スタッフの一人ひとりの想いだ。

*レスパイトケア
介護を要する方が福祉サービスなどを利用する間、ご家族が一時的に介護から解放され、休息をとれるようにする支援

「娘の結婚式も出られず、孫も抱っこできなかったで！」



松永さんの自宅での生活を支えるスタッフ

在宅療養をサポートしてくれるはあとふるグループの看護師
ハートパークはびきの山本 弥生さん

在宅でのリハビリをサポートしてくれるはあとふるグループの理学療法士
ハートパークはびきの鈴木 陽子さん

在宅介護・生活の相談窓口
はあとふるグループの介護支援専門員
介護サービスセンター ゆうゆう亭
内田 勝久さん

自宅での入浴をサポートしてくれるケアワーカー
ロングライフホールディング
矢野 元信さん

福祉用具レンタルや住宅改修のスペシャリスト
福祉用具専門相談員
キコーメディカル株式会社
内田 勝久さん

自宅での介護をサポートしてくれる介護福祉士
羽曳野市社会福祉協議会
梶 千晶さん

特集
時々入院、ほぼ在宅
八尾はあとふる病院の地域包括ケア病棟

転落事故で脊髄を損傷し、ほぼ全身麻痺。「絶望と苦悩」に差し込んだ「生きるよろこび」

仕事中的ケガで脊髄を損傷 首から下が麻痺に

植木職人だった松永さんがケガをしたのは、2015年4月。仕事の一瞬のミスで5mの高さから転落した。「命はとりとめたものの、脊髄を損傷。首から下に麻痺が残った。「もう体は動かない...と先生から聞かされたときは、一番つらかったですね。仕事ではちょっと若い職人2人を育てている途中で、中途半端に投げ出すことになり、2人に悪いなという気持ちがありました」。

八尾はあとふる病院での入院生活も、最初からスムーズだったわけではない。「尿路感染症で高熱が出ていたときに、この病院に転院して来たんです。しんどくてね。転院から3カ月間くらいは、よく担当の看護師さんにあたっていました」。医師からは「1日も早くリハビリをはじめ、体を動かす神経を回復させる方がよい。動くことで機能が回復するから」と説明を受けていた。最初はリハビリ用ベッドの背を上げただけでも起立性低血圧によるめまいがひどかった。「こんなに苦しい思いをするなら、リハビリなんかやりたくない。歳も歳だしゆっくりしたい、と思ったこともありました。でも、理学療法士さんも作業療法士さんも、みんな一生懸命がんばってくれているから、こっちはちゃんとやらなきゃかんなどと思ってね。リハビリ以外の時間には入れ替わり立ち代わり看護

師さんが病室に来てくれて、いろいろ話を聞いてくれました。やらなきゃかんはずのリハビリも、こっちは気が弱っているときには、あんまりがんばらなくてええよ、と言ってくれました(笑)。転院当初はひどいことも言ったのに、本当によくしてもらいましたよ」。

奥さんの明美さんは言う。「ケガをして、私たちの生活はガラリと変わりました。おろろろするばかりで、何も考えられませんでした。でも病院で皆さんによくしていただいたり、少し安心できたんです。退院時カンファレンスでは、市の補助や、訪問介護・看護などの医療・介護サービスの情報を聞き、さらに、自宅に帰ってから困らないようにと、自宅でのリハビリのやり方や看護の仕方をも丁寧に教えてもらいました」。

グループ内の情報共有で、ご本人のやりたいことを実現

グループ内の情報共有で、ご本人のやりたいことを実現

自宅に戻ってからは、はあとふるグループの訪問看護スタッフ(看護師・理学療法士)が、他事業所の訪問介護、訪問入浴、福祉用具貸与サービスと連携し、在宅生活をサポートしている。患者さんの情報は細かく共有し、すべて理解したうえでケアにあたることで、切れ目のない細やかなリハビリ・ケアを提供できる。奥さんも「日曜日以外は、毎日ごなたかが来てくださいます。来てくださっている間は私もゆくりできます。家にあるものを使って生活しやすくなる工夫も教えていただけなので、本当にありがたいです」と話す。

在宅で療養を続ける松永さんは、これまでに1カ月程度のレスパイト入院を4回利用されている。「病院には、歩行練習に使う装具や免荷リフトなど、さまざまな設備があります。この機会を利用して、入院中にしかできないリハビリを集中的にやるようにしているんです。1度目は娘の結婚式に参列するため、長時間座ることを目標にしました」。

麻痺のある患者さんにとっては車いすに座ることだけでも、難易度は高い。松永さんも「行かない」と弱音を吐いたことがあった。しかし、病院、在宅双方で松永さんを支える理学療法士の岡本さんや鈴木さんが根気強くリハビリに立ち会い、2時間、3時間と座っていられる時間が

増えていった。最終的には結婚式と披露宴に参加し、その前後を含め約8時間座り続けることができた。車いすを押し回すのも、娘さんとバースシロードを歩くこともできた。



3kgの特製砂袋でのトレーニングの甲斐もあり、お孫さんの抱っこも成功

袋を病院で用意してくれて、抱っこする練習がはじまったんです。病院と在宅の切れ目のないサポートがあるのも、はあとふるグループの強みだ。「自分の状態を知っていただける同じ担当者さんが待っていてくれる安心感があるし、行きやすいから何かあるとついお世話になってしまっんです。もちろん行ったら行ったで、リハビリは大変なんですけどね(笑)。最初はここまで動くようになるのは、思ってもいませんでしたから」。

松永さんの次の目標は「自分でフォークを使って、食べ物口へ運び、食べること」だ。これまで口へ運ぶことはできたが、最近やっとフォークで食事することもできるようになってきた。奥さんとさまさまのスタッフに支えられ、松永さんのリハビリはこれからも続いていく。



自宅に貼られている、スタッフお製の松永さん専用「介護虎の巻」

在宅サービスの利用状況

- はあとふるグループ 訪問看護 (看護師2回/週、理学療法士2回/週)
- 他事業所 訪問介護3回/週、訪問入浴2回/週



松永さんの八尾はあとふる病院 地域包括ケア病棟利用について

- 2016年3月 (17日間入院)
 - 【目標】長女の結婚式に参列できるだけの座位時間の獲得
 - 座位時間の延長が図れ、結婚式に参加することはできたが、当初は「どうせでへんし、諦めてる」と消極的な言葉も多かった。
- 2016年6月 (15日間入院)
 - 【目標】車いす上での自主トレーニング、安定した座位姿勢の獲得
 - 退院後は、iPadを導入し座位の活動量が増大。
- 2016年11月 (28日間入院)
 - 【目標】座位で行える趣味活動の方法確立
 - 入院中にiPad用タッチペンを保持するためのスプリントを作成。「iPadで新聞、孫の写真や動画を見られるようになりたい」といった前向きな発言がでるようになった。
- 2017年3月 (40日間入院)
 - 【目標】孫を抱っこする
 - 入院時には、孫を抱っこするための動作訓練や環境設定、家族指導を実施。目標達成に向けてリハビリに対する意欲が向上。自主トレーニングも積極的にを行い、定着させることができた。




一緒に話す・笑う、失った機能を回復する、生活を再建する etc. 「寄り添う」ことからすべては始まる。

「その人らしさ」のために、いま私たちができること、すべきこと。

理学療法士

座る、立つ、歩くなど基本動作の回復を支援



岡本 広豊さん

初めての入院時に「結婚式出席のための座位時間延長」を目標とされていた松永さんですが、当時の座位可能時間は長くても2時間弱でした。「今のままでは、結婚式当日にしんどくなってしまいますので、座れる時間を徐々に伸ばしていきましょう」というお話をし、リハビリをスタートしました。松永さんの場合、座位時間延長のポイントとなったのは、ご本人の意欲、座位の持久力の向上、車いす座位に必要な可動域の改善などでした。そのため理学療法では、基礎体力の向上や可動域の拡大に主眼を置き、作業療法士の野々山さんと一緒になって、病室やご自宅での自主トレ推進による活動量アップに狙いを定めてリハビリにあたりました。当病棟では、入院されるたびに基礎的な能力を計測し、再評価を行っています。その結果をチームで共有したうえで、入院中のリハビリ計画を策定。在宅ケアのサービス内容も把握しているため、自宅に戻られた後のことまで考えたリハビリをするようにしています。

作業療法士

目標実現に欠かせない動作のリハビリを担当



野々山 あづみさん

作業療法士は社会に適応できるよう、心と身体のリハビリを行う職種で、日常生活をスムーズに行うためにさまざまなアプローチをします。入院前には、医療ソーシャルワーカーから情報をもらい、リハビリの目標、訪問リハビリの進捗、家での生活の写真などを確認しました。病棟にお迎えした後は、「こうなりたい」という思いをあらためてうかがい、どんなリハビリをするかを一緒に考えました。残っている能力・機能に合わせてオーダーメイドで自動具をつくり、リハビリがしんどいなかでも「今できること」を松永さんと一緒に探しました。また「お孫さんを抱っこすること」も、不可能ではありませんでした。それで、3kgの砂袋を抱える練習など「しんどいかもしれませんが、がんばりましょう」と一緒に取り組みました。後日、在宅に戻られた松永さんから赤ちゃんを抱っこしている動画が届いたときは、本当にうれしかったです。

介護福祉士

食事や入浴など病棟での日常生活やその意欲をサポート



宗野 拓さん

食事、入浴、排せつなどの介助のほか、松永さんが大好きなコーヒーを用意するなど、入院時の生活全般をサポートしました。入院当初は「自分は何もできない」とおっしゃるときもあり、リハビリに消極的な日もありました。しかし、「娘の結婚式に出席する」「孫を抱っこする」などの目標ができてからは、やる気もみるみるアップしました。食堂で昼食を食べた後すぐにベッドへ戻るのではなく、そのまま車いすに座ってテレビをご覧になるようになりました。病室でも、私から「自主トレしましょうか」とお声がけするとすぐに「よし、よろか!」と言って、リハビリスタッフが立案した病室でできる課題に取り組まれるなど、意欲も加速度的に向上していきました。私たちケアワーカーは、患者さんと関わる時間がほかのスタッフよりも長めです。何気ない会話のなかから松永さんの思いを聞き出し、ご自身の意思で気持ちよく自主トレができるようにサポートしていました。

地域包括ケア病棟事業責任者

リハビリ・ケアを通じて、体と心の暮らしを再建



源 夏野さん

松永さんが搬送された病院から、当院へ転院される際に、体の状態や、本人、ご家族の希望や不安を確認するための面談を担当しました。転院時、生活環境が変化することで生じる負担を最小限にするため、情報をスタッフ間で共有することが重要となります。また、同じ病気で患者さんの背景や価値観などによってリハビリの目的は異なりますので、その人ごとの対応が大切になります。娘さんの結婚式に参列するなど具体的な目標を掲げ、リハビリ・ケアに取り入れていく工夫をしています。地域包括ケア病棟の入院は、慣れ親しんだ場所で継続した生活が送れるように、生活力を高める機会であり、介助されているご家族が肉体的、精神的な疲労を回復できる機会でもあります。当病棟への入院を機に患者さんを含めたご家族の生活を再建できればと考えています。慣れ親しんだ場所で生活しながら「時々入院する」という選択肢は、これまであまり浸透していませんが、ぜひご利用いただければと思います。

医療ソーシャルワーカー

入退院支援の窓口として多職種・他機関と調整する



尾本 幸一さん

地域連携室で、主に退院支援の業務を行っています。具体的には、入院中の困りごとの解決、退院時には在宅生活がスムーズに行えるよう、利用可能な制度やサービスなどをご案内しています。退院される時には、介護保険サービスの利用対象年齢ではなかったため、お住まいのある市役所へご家族と一緒に向かい、市の職員さんに助言をいただきながら、福祉サービス利用の申請や手続きを行いました。松永さんは、定期的に地域包括ケア病棟へ入院されています。入院前には、在宅医療・介護に携わるスタッフから情報提供を受け、病棟でケアにあたる専門職全員で共有してから、お迎えするようにしています。入院することにより、自宅で行ってきたリハビリを引き継ぎながら、さらに充実したリハビリ提供が可能で、同時にご家族のレスパイト(休息)も可能です。医療ソーシャルワーカーとして、患者さんはもちろん、ご家族の心理面もサポートできるように心がけています。

看護師

患者さんはもちろん、ご家族にも寄り添うケア



木俣 恵さん

看護師として、褥瘡のケアや予防を中心に関わらせていただきました。当病棟では、「入院中に何をできるようになりたいか」という患者さんの目標を、多職種によるチーム医療で支えています。松永さんのベッドサイドに立ち寄ったときは、リハビリの自主トレを促すこともしばしばありました。「お孫さんの抱っこ」を目標に腕の上げ下げをする松永さんを見守りながら、「もうちょっとできるよ!」とお声がけをしていました。松永さんの奥さんともいろいろなお話ができる仲になり、「入院期間中はリフレッシュできましたか?」とお声がけすることもありました。地域包括ケア病棟の役割には、ご家族のレスパイトケアも含まれています。長くご自宅での療養生活を続けるためにも、こういう入院が必要なのだと思います。何度か入院される患者さんには、同じメンバーがチームを組んでケアを実施します。次第に信頼関係が深くなり、「入院するならここがいい」という声をいただけること、本当にありがたいなと思います。

第27回 はあとふる学会

はあとふる学会

第27回：テーマ「温故知新」開催

超超高齢社会を見すえ
古きを温ねて、新しきを知る

はあとふる学会 開催の歴史

1992年11月	第1回 島田病院学術発表会	テーマ「管理元年・学問元年」
1994年3月	第2回 島田病院学術発表会	テーマ「理想の医療をめざして」
1994年12月	第3回 島田病院学術発表会	テーマ「自立」
1996年2月	第4回 島田病院学術発表会	テーマ「基盤整備」
1997年3月	第5回 島田病院学術発表会	テーマ「インフォームドコンセントやっていますか?」
1998年3月	第6回 はあと&はんず学会 (名称変更)	テーマ「できてんの?」
1999年3月	第7回 はあと&はんず学会	テーマ「世紀末のヘルスケアサービス」
1999年11月	第8回 はあと&はんず学会	テーマ「磨こう! 見つめよう! 輝かしい2000年のために」
2000年11月	第9回 はあと&はんず学会	テーマ「私達が目指す21世紀のケア そのサービスあなたは買いますか?」
2001年11月	第10回 はあと&はんず学会	テーマ「見つめ直そう! その心と技術 ～顧客中心のヘルスケアを目指して～」
2002年11月	第11回 はあと&はんず学会	テーマ「得意技を[決める][磨く][競う]」
2003年11月	第12回 はあと&はんず学会	テーマ「適者生存 ～Survival of the fittest～」
2004年11月	第13回 はあと&はんず学会	テーマ「安全と安心に貢献する」
2005年11月	第14回 はあと&はんず学会	テーマ「本物の追求」
2006年11月	第15回 はあと&はんず学会	テーマ「HOSPITALITY～ホスピタリティ～」
2007年11月	第16回 はあと&はんず学会	テーマ「感性と感動ー感性を研ぎ澄まし感動を届けー」
2008年11月	第17回 はあと&はんず学会	テーマ「情報の共有化と活用 ～機能特化に関する 情報集約・分析から公開へ～」
2009年11月	第18回 はあと&はんず学会	テーマ「見つめよう! 機能と役割を ～それぞれの担う機能の確認・推進・検証～」
2010年11月	第19回 はあと&はんず学会	テーマ「Love, Dream, Happiness ～患者さんや仲間と愛がある、夢がある、 そして患者さんとも仲間も幸せをともに～」
2011年11月	第20回 はあとふる学会 (名称変更)	テーマ「Challenge ～紡ぐ～ NEXT STAGE」
2012年12月	第21回 はあとふる学会	テーマ「謙虚に、素直に、学ぶ心 ～すてきなプロフェッショナルになるために～」
2013年12月	第22回 はあとふる学会	テーマ「多職種協働でつなぐ包括ケア ～地域ブランド力を高めよう～」
2014年11月	第23回 はあとふる学会	テーマ「専門性の追求 相互理解によるチーム力強化」
2015年11月	第24回 はあとふる学会	テーマ「育む ～相互理解によるチーム力強化～」
2016年11月	第25回 はあとふる学会	テーマ「伝承と革新 ～相互理解でつなぐ～」
2017年11月	第26回 はあとふる学会	テーマ「我々の強み」
2018年11月	第27回 はあとふる学会	テーマ「温故知新」

第27回 各賞 受賞者

理事長賞

「運動器ケア しまだ病院における医療ソーシャルワーカーの役割」
運動器ケア しまだ病院 社会福祉士 上西 未夏

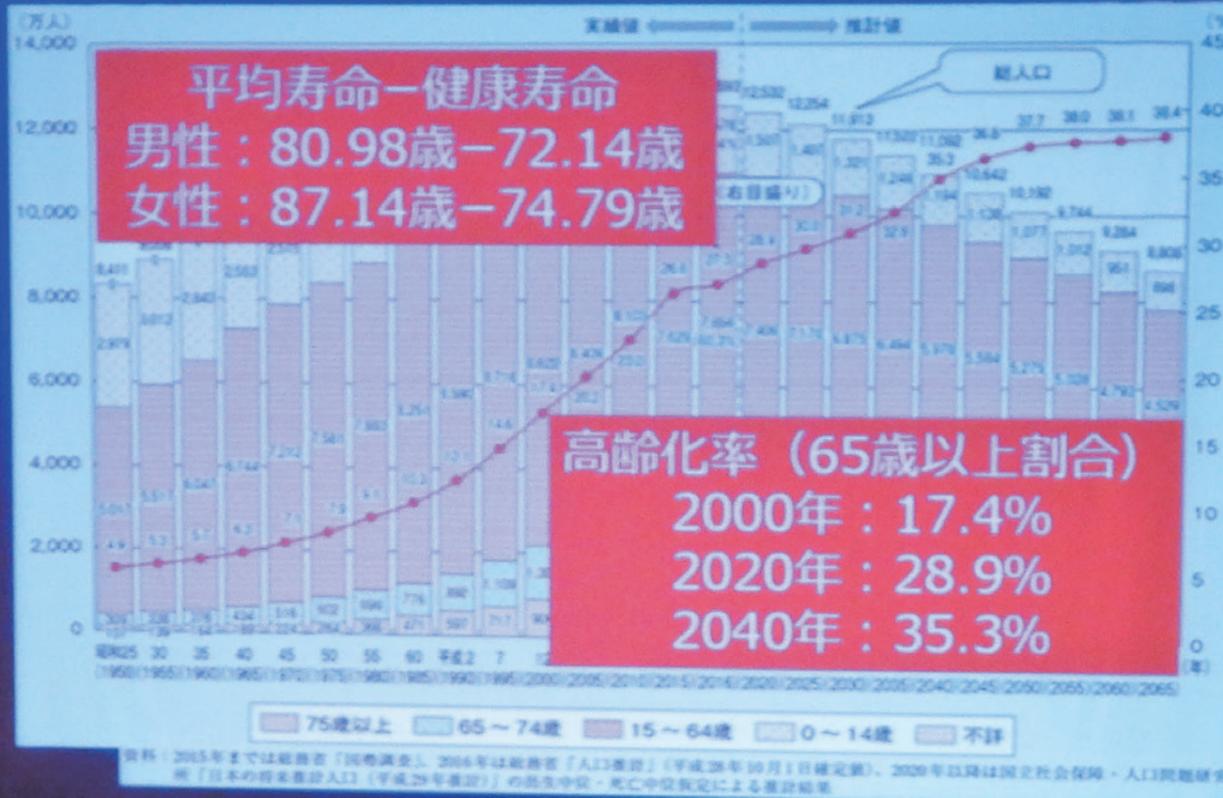
学会長賞

「孫、抱っこできたで!! ～重度脊髄損傷ケースに対する法人内連携による
目標達成までの道のり～」
八尾はあとふる病院 作業療法士 野々山 あづみ

金賞

「あなたの笑顔に会いたくてII～回想とメモリーブックを通して～」
介護老人保健施設 悠々亭 言語聴覚士 江良 優子

背景 (超高齢化社会と介護について)



1992年、まだ、島田病院(現:運動器ケア しまだ病院)だけの医療法人永広会で、「島田病院学術発表会」が始まった。テーマは「管理元年・学問元年」。管理体制が不十分で、学問が積み重ねられた組織ではなかったことを自覚し、元年と宣言した。それが、現在に至るまでの学会の原点である。

1997年、八尾はあとふる病院そして介護老人保健施設 悠々亭が組織に加わり、第6回から「はあと&はんずアカデミー」に名称を変えた。多くの仲間とともに、学びの場、成果発表の場としてのカタチを形成させた。

2011年、理念を「私たちは、その人がその人らしく自分の人生を全うすること」を Warm Heart: Cool Head: 知識 Beautiful Hands: 技術 で支援します」と改定し、「はあと&はんず」に「へっど」が加わった。その機会に、「はあとふる学会」と名称を変更した。時々の社会・医療情勢を背景に、はあとふるグループの理念を実現するための取り組みがテーマに込められている。歴代の学会を作り上げた学会長、そしてたくさんの方の想いの想いが重ねられている。

2018年、昨年のテーマは「温故知新」。小さな会議室で始まった学会は、大ホールに300名を超える仲間が集うようにカタチを変え、1年の中でも私たちの warm heart がもつとも揺さぶられる時間となった。

れる組織として、努力をし続けなければいけない。

オーバーヘッドプロジェクター(OHP)と工夫を凝らした差し機、そして小さな会議室から始まった私たちの取り組みの歴史は、大ホールで、パソコンを駆使した発表に変化した。カタチは進化しても、変わらない想いを胸に秘め、仲間とともに歩んだ27回を振り返り、そして未来に想いを巡らせる。人口動態が予測できる未来とするならば、私たちが取り組むヘルスケアの世界は、予測できない不確かな未来なのかもしれない。

はあとふるグループは、仲間とともに、地域に必要とされる存在としてあり続けるために、これからも学び続ける組織でありたい。

はたしてこれから、はあとふる学会は、はあとふるグループは、掲げる理想に「歩でも近づき、また新たな革新を生んでいくのだろうか?」

はあとふる学会で配布された発表抄録集の裏表紙にはこんな言葉が書かれている。

はあとふるケアの種が花を咲かせ実を結ぶように

運動器ケア しまだ病院の定礎に刻まれた、私たちがケアに込め続ける想いである。

また、みんなではあとふるケアの種をまく新たな毎日が始まり、積み重なっていく。成果である花や実を2019年のはあとふる学会で共有し、成長していきたい。

今回の学会で賞を受賞した発表は、その人がその人らしく、自分の人生を生ききる、生き抜くために、私たちははあとふるグループができること、しなくてはいけないことに取り組んだ成果を示したものが多かった。まさに今の社会に寄り添った発表であった。

誰もが予測できる確実な未来がある。それは、人口動態である。とりわけ、日本は世界の中でも先陣を切って、超高齢社会を経験する国となる。5年や10年の時間軸では、変えられない確実な未来がすぐそこに迫っている。確実に迫る未来に向けて、私たちははあとふるグループは「はあとふる学会」を軸のひとつとし、今までも、これからも「温故知新」、古きを温ねて、新しきを知ることで、その時代、その世代に敏感にチャンネルを開き、地域に必要なとさ



私たち病院で働くスタッフは果たして、患者さんの視点に立ったケアを提供できているだろうか。運動器ケア。また病院では、日々の「当たり前」を見つめ直し、地域における病院の立ち位置を見つめる機会として、2018年6月、第三者の客観的な視点で病院を評価する「病院機能評価」を受審した。

初めての審査は15年ほど前にさかのぼる。今では、電子カルテなどのICTが普及し、組織内であれば、どこにいても情報の共有が容易になったが、当時は紙のカルテで、ひとつのカルテをみんなで見て共有する時代であった。いつからか、そばにあるパソコンに目をやり、記録を残すことに時間を費やすようになった。そしてそれを当たり前だと捉えてはいないだろうか。昔から決して変わらないもの、それは、私たちの前には、患者さんやご利用者がいてはじめてケアを提供できるということ。それが根底にあるということ。働くスタッフみんなが持ち続けなければならぬ。

恵まれた環境のもと、「当たり前」と捉えることが増え、それがしまだ病院の風土へと醸成されていく。その風土が良い方向に向いているのか、はたまたそうではないのか。もちろん、患者さんやご利用者、ご家族よりいただく声から見えてくるものもあるが、より多角的な視点から私たちの取り組みに対する

いま、高齢者が人生の最後まで、住み慣れた地元で主体的に活動や社会参加を行い、生きがいを持ちながら生活を送るために必要な支援が求められています。それを厚生労働省では「地域包括ケア」とよんでいます。



客観的な評価を知る必要があった。2016年5月に病院が建て替わり、患者さんやスタッフの想いがようやくカタチとなった。受審表明が2017年7月、およそ1年の歳月をかけ、患者さんの視点に立ったケアとは何かを追求し、われわれの強みとは何か、改善が必要とあれば、改善に向けた話し合いがなされた。90にもおよぶ評価項目があり、それらを見ていただく日がやってきた。

「運動器ケア」に「特化」することへの理解

事前の書面審査で、しまだ病院のいわば骨格部分はご理解いただいたうえで、訪問審査の日を迎えた。しまだ病院は、「運動器ケア」に「特化」した病院であり、一般的な「病院」とは異なる点が多い。当日はまず、評価調査者に「運動器ケア」した病院とは」を知っていただくことから始まった。「運動器ケア」に特化した病院を理解いただくためには、実際に私たちが大切にしている、強みと捉えているところを伝え、実際に見てもらったことが大切だと考えたから。審査の2日間、大いに意見を交わした。結果、次に続く評価の内容からも伺えるように、「運動器ケア」とは何かについて、十分にご理解いただけたと感じている。

10月5日付で認定となり、しまだ病院としても強みと捉えていた

います。

長年、暮らしてきたわがまち。そのまちで行われるお祭りを、子ども世代、孫の世代と一緒に作りたい、盛り上げたい、楽しみたい。そのご利用者の想いを叶えたい。まだまだ「誰かの役に立つことができない自分」でもあるんだと、自信を取り戻してもらえたら...という思いから始めた試みです。

ゆうゆうハウスのご利用者は、平均年齢が85・3歳。手足が動かさにくい方や認知症の方などがいらっしゃると思います。灯ろう看板や風ぐるまなどを製作する過程で、その人の「できること」に合わせた作業を提案し、スタッフがお手伝いすることで、ご利用者全員が参加できるよう工夫しました。それでも難しい部分は、ご利用者同士で助け合う場面もみられ、お仕着せでない、自然に生まれた新しいコミュニティは、実は作品完成よりも嬉しいことでした。そして、皆さん、達成感ある笑顔を見せてくれました。製作物のデザインも、イベント開催の季節に合わせて自分たちで考えます。例えば、夏は金魚やアサガオなどの絵や装飾を施し、素晴らしいできばえです。

ご利用者のなかには、高鷲南地区にお住まいの方もおられ、地元の大津神社や地域の思い出話などをしてくださる場面もありました。本日は、ご利用者ご自身がお祭りの会場に足を運んで、そこで活

私たちの『当たり前』を見つめ直す ～病院機能評価を受審して



いくつになっても、動けなくなっても、地域のために、何かができる 自分でいたい

通所介護ゆうゆうハウスでは、高齢者の生きがいと社会参加を支援しています。

「地域に向けた教育・啓発活動」、「療養環境」、「周術期対応」、「リハビリテーション」、そして「病院管理者・幹部のリーダーシップ」という5つの項目において、「非常に秀でてい」という高い評価を得た。しかし同時に、改善すべき点もはっきりと浮き彫りになった。

今回、高い評価を得たこと自体は誇るべきことの一つだ。しかし、それよりも大切なことは、日々の活動を通じて、われわれが強みと捉えている部分が、客観的視点で見ても強みであると再確認できたことだ。今回の評価を、これからの私たちの新たな「当たり前」にするべく、これからも、成長し続けていきたい。

●病院機能評価とは

公益財団法人日本医療機能評価機構が、病院の質改善を目指して、国内の病院を対象として、組織の運営管理や提供される医療を中立的・科学的・専門的な見地から評価を行う制度。

●評価調査者(サーベイヤール)について

各専門領域(診療管理、看護管理、事務管理)の知識と経験を有する評価調査者(サーベイヤール)が、チームとなって病院を訪問し、中立性および公平性を保持して審査に臨む。サーベイヤールには、病院管理経験等の一定の資格要件との日本医療機能評価機構の研修の修了が必要。

活動初年度の2017年は「作る」作業で手いっぱい。2018年はどうすれば「参加」した実感を持っていただけるのか?をテーマにして、実行計画を組み立てました。

イベント当日は、ご利用者の代わりにスタッフがボランティアとして参加。写真や映像を撮影し、後日、ゆうゆうハウス内で上映会を行いました。すると、皆さんは自分たちが作った灯ろう看板や風ぐるまを見て喜ぶ地域の子どもの笑顔を見て、「地域のために何かできることは嬉しいなあ」、「みんな喜んでくれていてよかったわ」、「90歳超えて、いつかないなるかわからんけど、こんな機会がまたあったら言うてくれるか」などの感想をくださいました。

その笑顔を見ると、間接的でも地域活動に参加し、貢献できたこと実感していただけたのではないかと思います。

今回の新たな取り組みで、「いくつになっても、私も地域の一員として、役に立ってるんやわ」というワクワクした気持ちを思い出していただき、それが「生きがい」に少しでもつながったとしたら、それは、実は、私たちケア提供者の大きな喜びで、一番のご褒美です。

●認定/認定病院
病院機能評価により、一定の水準を満たした病院は「認定病院」となる。認定病院は、地域に根ざし、安全・安心・信頼と納得が得られる医療サービスを提供するために日常的に努力している病院と言える。

※公益財団法人 日本医療機能評価機構HPより抜粋

運動器ケア しまだ病院が受審した評価項目概要

- 【対象】一般病棟1 <3rdG:Ver.2.0>
- 1領域 患者中心の医療の推進 計21項目
 - 患者の意思を尊重した医療 (6項目)
 - 地域への情報発信と連携 (3項目)
 - 患者の安全確保に向けた取り組み (2項目)
 - 医療関連感染制御に向けた取り組み (2項目)
 - 継続的質改善のための取り組み (4項目)
 - 療養環境の整備と利便性 (4項目)
- 2領域 良質な医療の実践1 計35項目
 - 診療・ケアにおける質と安全の確保 (12項目)
 - チーム医療による診療・ケアの実践 (23項目)
- 3領域 良質な医療の実践2 計14項目
 - 良質な医療を構成する機能1 (8項目)
 - 良質な医療を構成する機能2 (6項目)
- 4領域 理念達成に向けた組織運営 計20項目
 - 病院組織の運営と管理者・幹部のリーダーシップ (5項目)
 - 人事・労務管理 (4項目)
 - 教育・研修 (3項目)
 - 経営管理 (3項目)
 - 施設・設備管理 (2項目)
 - 病院の危機管理 (3項目)



医療法人はあとふる広報戦略室 高松 千沙登



レポート報告



社会福祉法人はあとふるゆうゆうハウスリーダー 播摩 由紀子
・介護福祉士
・介護支援専門員
・認知症介護実践リーダー
・研修修了者

Information

「骨の健康と栄養について学ぼう」をテーマに、病院を開放して実施しました。骨密度測定や体力測定、相談ブースを開設。専門職によるセミナーも3講座開設し、総勢83名の方にご参加いただきました。今後も地域の健康への貢献が期待されます。

催告 出張はあとふる教室
開催 八尾はあとふる病院
2018年10月19日開催
第1回オープンセミナー

「転倒予防のすすめ」正しい知識でいきいきとした生活を！と題し、多くの方々にご参加いただきました。骨折につながる転倒を予防することの重要性を、地域に広められる良い機会になりました。

2018年11月28日開催
「病院の種類と制度について」というテーマで、病気や急な事故で入院することになった場合、誰に相談したらいい？どんな病院にかかったらいい？など、参加者の皆さんと話し合う、双方向の教室となりました。

2018年10月16日開催
テーマは「嚥下（飲み込み）の話」。専門的なことをわかりやすく伝えつつ、今日からすぐ心掛けられるポイントや嚥下体操など、ライブ感あふれる健康指導で、あっという間の30分でした。

2018年11月14日開催
島田理事長の「みんないつか死ぬんですが…」の講演では、死についてネガティブな印象ではなく、最期まで生き抜く生きるといったメッセージが込められており、会場の参加者の方も大変共感されていきました。その後は、Eudynamis ウィングラスの内海トレーナーが、頭とカラダをいつまでも健康に、しっかりと食べることをテーマにそれぞれに効果のある運動を行い、会場が笑顔に包まれました。

もっと詳しく知りたい方や、その他の情報は、ホームページ・フェイスブックでも掲載しています。ぜひご覧ください。

2018年12月7日現在、全国の8389病院のうち2184病院が認定を受けています。そのうちリハビリテーション機能として、付加機能の認定を受けている病院は大阪府下でわずか4施設です。その一つに八尾はあとふる病院が含まれています。

認定を受けたことに満足せず、より良質のヘルスケアサービスを提供できるよう、いままでも以上に機能の改善及び向上を行ってまいります。

● 八尾はあとふる病院（リハビリテーション）病院 機能種別版評価項目 3rdG:Ver.2.0 / 付加機能（リハビリテーション）機能 Ver.3.0
● 運動器ケアした病院（一般病院）機能種別版評価項目 3rdG:Ver.2.0

機能評価 日本医療機能評価機構の認定を受けました。

厚生労働省より、2018年11月25日時点で風疹患者は2313人、そのうち2263人は7月23日以降の発生であり、2017年の93人を大幅に上回っていることが報告されました。患者の多くは、30〜50代の男性です。

妊娠中の女性が感染すると、先天性風疹症候群の子どもが生まれる可能性があるため、注意が必要です。妊婦、妊娠を希望する女性および妊婦の同居家族の方は、積極的に抗体検査を受けましょう。

抗体検査の結果、抗体が低かった方は予防接種を受けましょう。

● 感染経路：飛沫感染、接触感染
● 潜伏期間：2週間〜3週間
● ウイルス排出期間：発症7日前〜発症後5日

● 症状：発熱、発疹、リンパ節腫脹
● 治療：対症療法
● 予防：風疹ワクチン

感染予防 今年も風疹が流行しています！

2018年12月7日現在、全国の8389病院のうち2184病院が認定を受けています。そのうちリハビリテーション機能として、付加機能の認定を受けている病院は大阪府下でわずか4施設です。その一つに八尾はあとふる病院が含まれています。



おろした蓮根は火を通すとデンプン質の働きでモチモチの食感に！

vol.1 蓮根団子のあったか根菜鍋

うまさうな雪がふうはりふわりかな

＜小林一茶＞



秋から冬にかけて旬を迎える「蓮根」は「先を見通せる」という意味合いから縁起物としておせち料理等になじみ深い食材です。古くから薬用としても食べられており、ビタミンCが非常に豊富で、疲労回復、かぜの予防、がん予防、老化防止に効果があります。ビタミンCは熱に弱いですが、蓮根にはデンプンが多いため加熱しても相当量のビタミンCが残ります。そんな蓮根を使った、あったかレシピを紹介します。

<蓮根 Cooking のマメ知識>

● **選び方**
＜カットされていない(穴が見えない)もの＞
ふっくらと丸みを帯び、ずっしりと重みを感じるものがオススメ。重いほど水分を多く含んでいます。乾燥すると表面の艶が無くなり、茶色いシミのようなもの浮き出ます。また、不自然に白い蓮根は漂白されている可能性があります。それらは避けた方がよいです。
＜カット済みもの＞
切り口が変色していないものを選びましょう。蓮根は、ワインなどに含まれる、ポリフェノール類が豊富。そのため、切った時間が経つと切り口が紫色に変色します。

● **保存方法**
＜カットされていない(穴が見えない)もの＞
新聞紙などを濡らして包み、さらにポリ袋などに入れて、野菜室でなく冷蔵庫へ。泥つきなら、泥つきのまま表面を濡らして同様に処理・保存します。その方がさらに長持ちします。
＜カット済みもの＞
ラップで包んで空気を抜いて冷蔵庫へ。使うときに変色していれば、色がなくなる部分まで切り落とします。カット済みものは早めに食べましょう。

＜材料：2人分＞

① 蓮根 50g
長ネギ 1/3本(約30g)
鶏ミンチ肉 150g
卵 1個
片栗粉 大さじ2
しょう油 少々
塩こしょう 少々

② 人参 1/2本(約50g)
ごぼう 1/3本(約50g)
他、お好みのキノコや野菜

鍋のダシは和風がおすすめ!!

＜作り方＞

- 蓮根としょう油がはかりおろし、長ネギはみじん切りにする。
- ボウルに①と残りの①の材料を入れ、粘りが出るまでよく混ぜる。
- 人参、ごぼうはピーラーでスライスする。
- 土鍋にお好みのダシを沸かし、②を団子状にすくい入れ、火を通す。
- 最後に③の材料とお好みの具材を入れる。できあがり!

ポイント
根菜はピーラーでスライスすることで火が通りやすく、より美味しくなります。

…続きはブログをご覧ください

島田永和から皆さまへ向けたメッセージを発信していきます

今回、個人・島田永和として、ブログを始めました。きっかけは組織の会議のなかで、多くのスタッフから「私たちが取り組んでいることを、地域の方々や、もっと広くたくさんの方に知ってほしい」という声が上がったからです。私たちは医療や介護といったヘルスケアサービスを提供しているのですが、そのとき、いったい何を一番大事と考えているのか？ それをお伝えすることが足りないのではないか？ と思うのです。折に触れてさまざまな発信をしていますので、ぜひ一度お読みください。

はあとふるグループ
理事長ブログ
『島田永和』からの「はあとふるメール」

ブログはじめました
<https://ameblo.jp/heartful-health/>

【表紙の人】 作業療法士：野々山 あづみ Azumi Nonoyama

2016年八尾はあとふる病院入職。

入職後、回復期リハビリテーション病棟を経験後、現在は地域包括ケア病棟を担当。

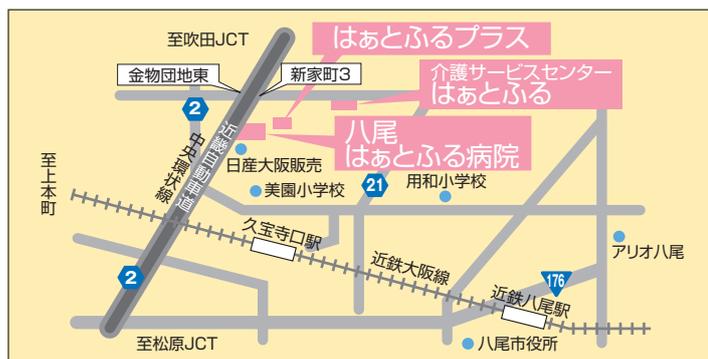
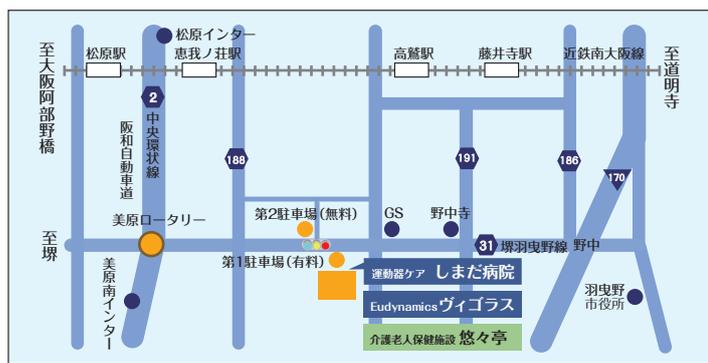
短い入院期間の関わりの中で、

いかに患者さんに安心して過ごしてもらえるかということを考えながら、

積極的に話しかけることを心がけている。

趣味：職場の仲間とのお出かけ、映画鑑賞。

その人がその人らしく自分の人生を全うすることを
Warm Heart -心- Cool Head -知識・判断- Beautiful Hands -技術- で支援します



はあとふるグループ

医療法人はあとふる

- 運動器ケア しまだ病院 Tel.072-953-1001 / Fax.072-953-1552
- Eudynamics ヴィゴラス Tel.072-953-1007 / Fax.072-953-1007
- 介護老人保健施設 悠々亭 Tel.072-953-1002 / Fax.072-953-1911
- 通所リハビリテーション Tel.072-953-0045 / Fax.072-953-1911
- 在宅介護支援センター 悠々亭 Tel.072-953-1003 / Fax.072-953-1332
- 介護サービスセンター ゆうゆう亭 Tel.072-953-5514 / Fax.072-953-1332
- 訪問看護ステーション ハートパークはびきの Tel.072-953-1004 / Fax.072-953-0022

〒583-0875 大阪府羽曳野市榎山100-1

- ヘルパーステーション 悠々亭 Tel.072-953-1062 / Fax.072-953-0022

〒583-0883 大阪府羽曳野市向野3-96-7

- 八尾はあとふる病院 Tel.072-999-0725 / Fax.072-923-0180
- 通所リハビリテーション Tel.072-999-0726 / Fax.072-923-0186
- 訪問リハビリテーション Tel.072-999-0725 / Fax.072-923-0180

〒581-0818 大阪府八尾市美園町2-18-1

- 介護サービスセンター はあとふる Tel.072-999-8126 / Fax.072-999-6118

〒581-0815 大阪府八尾市宮町5-6-22

- 通所介護 はあとふるプラス Tel.072-920-7216 / Fax.072-920-7256

〒581-0815 大阪府八尾市宮町6-6-16

社会福祉法人はあとふる

- 通所介護 ゆうゆうハウス Tel.072-931-1616 / Fax.072-931-1128
- サービス付高齢者向け住宅 ゆうゆうハウス Tel.072-931-1616 / Fax.072-931-1128

〒583-0875 大阪府羽曳野市榎山96-10